

父母が私をヴィナスとアドーニスの子だと思ふのなら満更悪くはないなと考えながら次のページを捲った。母の十一月一六日は空白になっている。おそらく、前日の分を一六日に認めた後、何も書く必要はないと考えていたからだろう。翌一七日母はプレチス・ホール社に出社して「、まあ、血色がよいこと、何かよいことがあったの」と聞かれて「トスカニーニの実演を聞いたわ」と言っても相手は「何かを隠しているわね」とからかったそうだ。その日の日記は長いから要点だけ出しておこう。

一九五二年十一月一七日 月曜日

一昨日の出来事を考えながら、実習先の出版社にでかけた。五番街のバスは今日も鈍行だが、かまわない。道に行く人たちの顔がいつものよりも楽しそうに見える。実習者のあたしにあてがわれた小さなデスクにつく。皆があたしの血色がいいとほめてくれた……これが性の発見のしるしかしら。体のなかに炎が燃えているのを感じる。温かみを与えてくれる、今まで知らなかった快感だ。あたしは処女を失ったとか、それはいけないことだった、という罪悪観をもつていやしない。あたしは禁断の実をたべた。それはとてもおいしい実だった。母のムードはしかし徐々に変わっていく。

一九五二年十一月二四日 月曜日

土曜日に生理が来るはずだったのに、その形跡は、昨日も今日もなかった。まさか妊娠したのではあるまい。そう言えば食欲があまりない。一昨日買ったストローベリー・ショートケーキはそのまま冷蔵庫に残っている。

二五日 火曜日

朝七時に起きてコーヒーを飲んでも眠気が覚めない。風邪を引いたように体がだるくなって、シャワーを浴びたら、おっぱいの張りを感じた。実習所には今日いけないと電話をし、また寝た。

二六日 水曜日

近くの医者のアポイントメントがとれなかったので、一一四番街の聖ルカ病院に行つて見知らぬお医者さんに診てもらった。テストをしなければはつきりしたことは言えないが、五〇%以上妊娠確実だと思ふ、おめでとうと言われた。ではテストをとお願いしたが、二週間後に来なさい、早期のテストは頼りにならないから、との答えでがっかりした。その足でコロンビアの武彦の寮までいったが、彼はいなかった。

二七日 木曜日

今日はサンクスギビング。父さんに電話をした。妊娠のことは勿論言わなかった。クリスマスには必ず家に帰るから、と言った後急にさびしくなって、涙をとめることができなかった。なんにも食べずに寝た。

一二月一日 月曜日

コロンビアに行って、武彦に会った。あたし妊娠しているかも知れないといったら、どうしてこんなに早く分かるの、と聞くだけだ。あまりにも理知的で、こちらが迷っていて、ぐらついていて、求めているのは同情の言葉であり、愛情の支えだということを知らない。あの日と違って、全く未知の人に会ったような気がした。

彼は何を考えているのかしら。学寮の地階にあるライオンズ・デンという学生のたまり場を出て、一一六街の地下鉄駅についた時、あたしはまた泣き出したくなってしまった。

昼寝をした。ドレちゃん、泣いちゃ駄目だよ、という幼いタケちゃんの声で目が覚めた。

一二月二日 火曜日

あたし、どうしたらいいのかしら。若し昨日武彦が、「君と結婚するほかに道がないな」と言う結論を出してくれたら、あたし、すぐイエスと言ったと思う。でもそれは無理なこと。あたし、日本に行く気はないし、武彦の両親はどうあたしを迎えてくれるかしら。あたし、お馬鹿さんだなー、どうして、そんな出来もしないことしか考えないのかしら。

父さんにはまだこのことは話せない。夫なしに子供を生むのも、墮胎を考えるのもこわいことだ。考え尽きた後パリにいる伯母に会いたいと電話をしたら、すぐ来なさい、と言う返事だった。「パリに行く。おろすつもりだ」と簡単な手紙を武彦に書いて、伯母の住所を書き添え投函した。

一二月三、四、五日

パリに行くことが決まると急に元気になって、実習先に出社して、何事もなかったかのように、仕事をし、来週から新年までの休暇を申請した。羨ましそうな目でみられた。